

国語 試験問題

二月十日実施

注 意

- 一、試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二、問題は余白をふくめ、二十二ページにわたっています。
- 三、試験時間は五十分間です。
- 四、答えはすべて解答用紙の決められた欄に記入しなさい。

京華高等学校

受験番号
氏名

余白

問題は次のページから始まります。

余白

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

新型コロナウイルスの流行は、三月の最初あたりまでは、気をつけるように、と言われても、どこか遠くの、自分たちには関係のない出来事だという気がしていた。けれど、三月半ばに、五島とは別の島で最初の感染者が確認されてからは、一気に緊張の度合いが上がった気がする。島なのだから、外から入ってこない限りは大丈夫——それまではそう思っていたものが、限られた生活環境の中だからこそ、一度ウイルスが持ち込まれたら本当に大変なことになると今ではみんなが危機感を募らせている。

ランニングの途中で、気まぐれに声をかけてきたであろう武藤は、すぐにここからいなくなると思ったのに、日陰のない浜の前で、「あちー」とかシャツの首元をつまんで扇あおいだりしながら、立ち去る様子がない。話すこともなくて、だけど、二人でいるのも気まずくて、つい、円華の口から、もうひとつ、声が出た。

「武藤くんは、帰らなかったんだね」

呟つぶやくように言うと、武藤が無言で円華を見つめ返してきた。大きく、くつきりとした瞳に気圧けおされ、円華がさらに尋ねる。

「留学の子たち、結構みんな、地元に戻ったって聞いたから。来月とか、戻ってくる子もいるみたいだけど」

武藤が無感動な様子で「ああ」と頷うなずいた。

¹「一度帰ったら、またこつちに来るの、大変になるかなって思ってる」

「ああ——」

今度は円華が頷く番だった。一度島の外に帰ってしまったら、今度は来るのが大変になる。それは、寮に住む他の留学生たちも今まさに悩んでいるかもしれないことだった。旅館のすぐ裏に寮があるから、円華の母は寮母さんともよく話すのだ。だから、母に聞いた。

寮の子たちは、さまざまな場所から五島に来ている。東京とか、テレビで感染拡大地域と呼ばれているような場所に一度帰ってしまった子たちは、気も遣うかもしれない。島民にも、そこに戻る生徒にも、どちらにもきつと不安はある。

武藤がまた、あちー、と呟いて、額の汗を拭う。ついでのように続けた。

「だけど、オレも、今いるじいちゃんとはあちやんの家は出て、寮の方に移るかも。学校再開されたし、じいちゃんたち高齢だから、ちよつと心配で。だからオレ、今、家でもマスクなんだ」

「そうなんだ」

「うん」

相槌を打つのが精一杯だった。だけど、本当は気になっていた。武藤は野球に専念するために五島に留学してきたのかもしれないけれど、今は部活もできないし、夏の大会だつてどうなるかわからない。武藤は、推薦での大学進学を目指している、と聞いたことがあるけれど、高校最後の大会がなくなってしまったら、それはどうなるのだろう。うちの高校の野球部は甲子園に出るような強いチームではないけれど、学校も休校になって満足に人と会えない中で、高齢な夫婦との生活は退屈しなかったんだろうか、どうして帰らなかったんだろう。

「佐々野さんは、吹奏楽部だよね？」

「あ、うん」

またちよつと驚く。名前に続き、まさか部活まで知られているなんて本当に想定外だ。

「吹奏楽部も、今年は大会みたいなのはないの？」

「うん」

「そっか。——あのさ」

「うん？」

「ひよつとして、泣いてました？ 佐々野さん」

武藤の顔を凝視したまま——動けなくなる。

咄嗟とつさに思ったのは、なんで敬語？ ということだった。さつきまで普通にタメ口だったのに、急に。

答えに詰まる円華の前で、武藤がさらに言った。

「さつき、そんなふうに見えたから」

気づいたとしても、面と向かってそういうこと聞かかな？ と思う。だから声をかけてくれたのか、と妙に納得はしたけど、気まづかった。ひとりになりたくてここに来た、なんて意味深な答え方をしてしまったことも、改めて後悔する。

「別に、吹奏楽の最後の大会がなくなったから感傷に浸ってた、とかじゃないよ。確かに寂しいし、悔しいけど、そういう

んじゃなくて」

2 「うん。でも、誰かに何か言われたのかなって思ってた」

頬が、かっと熱くなる。武藤の視線は曇りなく、どこまでもまっすぐだった。

「……なんで」

か細い声が出る。武藤が円華に横顔を向け、椿のステンドグラスの天主堂のすぐ下——旅館や、寮の建物が並ぶあたりを見つめる。

「寮に住んでる、小山ってわかる？ 弓道部の。あいつもオレと同じで、休校の時もずっと地元戻らずにこっちにいたんだけど、そいつが学校行ったら、昨日、聞かれたって言ってたから。——つばき旅館、島の外から来た客を泊めてるみたいだけど、近くに住んでて大丈夫かって」

胸の真ん中がずくんと痛くなる。あ、やっぱり、そんなふうに言われてるんだ、とわかっていたはずなのに、それでもショックを受けてしまう。思わず、「あのさ……」と声が出た。

「それ、普通、本人に言う？ 私が知らなかったらどうするつもりなの？ 武藤さんの今の話で初めて知ったんだったら、すごい傷つくよ」

「でも、じゃあ、どうなの？」

武藤の声は笑っていなかった。円華は少しでも笑いごとにしたくて、呆れたように半笑いで言ったのに、真剣な顔でただじっと円華を見ている。

「知ってるの？ そんなふうに言われてること」

「……知ってるよ」

観念して頷くと、空の青さが沁みるようにまた目の奥が痛んだ。あわてて唇を引き結び、首を振る。

「知ってる。こんな時なのにまだ客を泊めてるのかって、うちが、周りから相当思われてそうなこと。さすがに、小山くんたちがそんなとばっちりを受けてるってことまでは、想像もしてなかったけど」

立地が近いというだけの理由で寮の子たちまでそんなふうに言われるのだとすれば、小春の言い分は、やはり仕方がないのかもしれない。³

学校が再開され、いつも通り、円華は今日、幼馴染みの福田小春と下校しようとした。そんなに長い距離じゃないけれ

ど、校門から並んで出て、小春の家の近くの分かれ道まで一緒に歩くのは、二人にとってはいつものことだった。だけど放課後になって、言われたのだ。

「ごめん、円華。しばらく、別々に帰ってもいい？」

どうしてか、最初は全然わからなかった。だから、純粹に「え？」と口にすると、小春が少しだけ早口になった。

「円華と一緒に帰ってるところ見て、うちのおじいちゃんとかおばあちゃんがちょっと心配になったみたいで。ほら、うちら、話しながら帰ってるから、マスクしてても、距離が近くて心配なんだって。お母さんとかも、うちのお姉ちゃんが施設で働いてることもあって、気になったみたい」

心配になったみたい、気になったみたい、というそれが、何を「気にして」のことなのか、円華にもだんだんわかってきた。でも、嘘うそでしょ？ と思った。頼むから、そんな理由からじゃないって否定してほしい。だけど、小春は話し終えると、それ以上は何も言わずに円華の方をただ見た。その目を見て、⁴体の芯が一瞬で冷たくなっていく。

小春とは、小学校からずっと一緒だ。中学から吹奏楽部なのも一緒。

小春の家のおばさんやおじさんとも小さな頃から顔見知りだし、おじいちゃんやおばあちゃんにだって会えば挨拶してきた。家にも何度も遊びに行つて、ごはんだってご馳走ちそうになったことのある小春の家の食卓やリビングを思い出したら、その中で、自分のことが——自分の家族や旅館のことがどう話題にされたのか、まざまざと想像できてしまつて、何も言えなくなつた。

「あー、わかつた」

どうしてそんなふうに言ってしまったのかわからない。傷ついていることを悟られまいとそうしたんだと気づくと同時に、あ、私、傷ついたので、と気づく。

小春は何度も「ごめんね」と謝っていた。

「ほんと、ごめん。帰つてるとこさえ見られなかったら、学校では喋しゃべつても大丈夫だから。今だけ、ほんと、ごめん」

「あ、うん」

「じゃ、先に行くね」

去っていく小春に、吹奏楽部の別の女子が駆け寄っていく。二人が何か話し、肩を並べて同じ速度で歩き始めるのを見た瞬間、円華はなるべくさりげないふうを装いながら、近くのトイレに駆け込んだ。二人がこつちを振り向きもせずに行つて

しまうのも胸が苦しかったし、こちらを向いて意識されるのもそれ以上に嫌だった。

小春の姉が働いている「施設」とは、高齢者が入居する介護施設のことだ。島は、人口に対して、医療や介護に従事する人の割合がとて高い。テレビでこのところさかんに言われる「医療従事者」の言葉が、今更のように胸を締めつける。小春の姉は、特に気をつけていて、家族みんなが大皿の料理を一緒につくようなことすら今はできずにいるのだと、そういうば少し前に聞いていた。

そっか、私、嫌がられてるのか。大好きな、小春の家のおばさんやお姉ちゃんたちから、警戒されてるのか。

誰にも、自分の姿を見られたくなかった。顔を伏せるようにして校門を出て、足元を睨むようにしながら家までの道を急いだ。誰も円華のことなど見ていない、気にしていない、と言いつても、心臓がすごく大きく鳴っていて、足にぎこちない力が入るのを止められなかった。

小春の声が、耳の奥で響き続けていた。

——帰つてるとこさえ見られなかったら、学校では喋つても大丈夫だから。

なんだそれ、と思う。

学校ならいいけど、帰り道は一緒にいられない。家族や、周りの目が気になるから。そう突きつけられて、明日からも教室で普通に小春と笑顔で接することができるとは到底思えなかった。別の子と一緒に帰る小春の背中。他の子とは一緒に帰れても、円華はダメ。それって。

差別じゃないか——。

差別、という言葉の大きさに、思ってしまった後から気持ち^{ひる}が怯む。高い場所から急に下を覗き込んだ時のような、足が竦む感覚があった。

円華の家がやっているつばき旅館は、小さいが、曾祖父^{そうそふ}の代から続いている古い旅館だ。そして、コロナのあれこれが騒がれ始めてだいぶ減ってしまったけれど、今も、それまでと変わらずにお客さんを泊めている。そのほとんどが島外のお客さんだ。長崎市内や福岡など九州本土からの人が多いけれど、中には、東京や大阪から泊まりに来る人もいる。うちを気に入って、東京から毎年来ている常連さんのひとりは、リモートワークになって出社しなくても仕事ができるようになったから、と確かに今も長期で滞在しているようだ。

休業するか、お客さんからの予約を取り続けるか。祖父母も両親も葛藤していた。円華には悟られまいとしていたようだ

ったけれど、円華が自分の部屋に引き上げると、大人が皆で話し合っている気配を感じた。消毒用のアルコールがなかなか手に入らなくて、どこか販売しているサイトがないか、円華も両親と一緒に探した。お客さんが安心して来られるようになって。

そういうことの葛藤の全部を、円華も見ていた。

休業を選ばず、営業し続ける選択をした家族のことを、円華もできる限り応援したいと思ったけれど、家族の間でも、話さないこと、聞けないことがだんだん増えていった。たとえば、泊まりに来たお客さんが、どこから来た人なのか。これまでは、何気なく両親に聞いていたけれど、今は構えないと聞けない。両親も、必要以上に明かさない。

——今だけ、ほんと、ごめん。

また、小春の声が蘇^{よみがえ}る。

今だけ、というその「今」は、いったいいつまで続くのだろうか。

(辻村深月『この夏の星を見る』による)

1. ———線部1に「一度帰ったら、またこっちに来るの、大変になるかなって思って」とありますが、その理由を円華はどのように考えていますか。最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 感染拡大地域と呼ばれる場所に行った留学生がまた五島に戻ってくることは、島民たちにとってさらなる感染拡大という懸念を生み、歓迎することができないから。

イ 島外から閉鎖的な環境の中にウイルスが持ち込まれてしまうことに対して、五島に戻ってくる留学生だけでなく島民も不安な思いを抱いているから。

ウ 感染拡大地域と呼ばれているような場所から戻ってきた留学生は、通学以外の外出に大きな制限が生まれ、寮での窮屈な生活を強いられてしまうから。

エ 島内での感染を恐れて一時的に帰宅してしまった留学生の多くは、自分が島に戻ることによって、島民を感染させてしまうのではないかという危機感を募らせているから。

2. ———線部2に「頬が、かっと熱くなる」とありますが、このときの円華の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 不意に泣いていたことを指摘され、立て続けに無神経な質問を並べる武藤に対して気まずさを覚えると同時に、どのように答えたらいいかわからずに戸惑っている。

イ 不意に泣いていたことを指摘され、武藤が真剣に悩みを解決しようとしているにも関わらず、嘘をついてやり過ごそうとした自分の行動を恥ずかしく思っている。

ウ 不意に泣いていたことを指摘され、武藤に涙を見られたことを恥ずかしく思い、この後の学校生活でどう振る舞えば良いかわからずに戸惑っている。

エ 不意に泣いていたことを指摘され、気まずさからうやむやにしようとしたが、武藤の言葉や様子から自分の泣いている理由を見透かされているような気がして恥ずかしく思っている。

3. ———線部3「小春の言い分」を円華はどのようなことだと考えていますか。端的に表している部分をひと続きの二文で探し、初めの五字を抜き出しなさい。

4. ———線部4に「体の芯が一瞬で冷たくなっていく」とありますが、このときの円華の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 家族ぐるみの付き合いがあり親友であると信じていた小春が、漠然とした不安から周囲の目を気にして自分を遠ざけようとしていることに気づき、強くショックを受けている。

イ 幼なじみであり親友と疑うことのなかった小春が、家族との会話の中で自分や家族、旅館のことを悪く言っているということを知り、強くショックを受けている。

ウ 小学校からの友人で部活も同じ小春が、自分との関係以上に家族の事情を優先して自分から距離を置く冷たい人間だということに気づき、強くショックを受けている。

エ 一番の大親友であると感じていた小春が、コロナを言い訳に嘘を並べて学校においても自分との関わりを断とうとしていることを知り、強くショックを受けている。

5. ~~~~~線部X「あー、わかった」から~~~~~線部Y「高い場所から急に下を覗き込んだ時のような、足が竦む感覚があった」までの円華の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア はじめは小春との関係はいつでも修復できると思っていたが、小春の家族のことを考えると修復しない方が良いということに気づき、自分の置かれていた立場を自覚し、自分の孤独を受け入れようとしている。

イ はじめは自分と距離を置こうとする小春を恨めしく思っていたが、次第に自分の犯した罪に気づき、自分が周囲の人間に避けられている現状に納得し、今後の生活に大きな不安を感じている。

ウ はじめは小春からの申し出に傷つくと同時に避けられていることに対する不満を感じていたが、次第に周囲の人間から自分がどのように見られているのかを理解し、自身の孤立を強く感じている。

エ はじめは小春や小春の家族を責めることは出来ないと考えていたが、周囲の人間にも同様に警戒されていることに気づき、抜け出すことの出来ない苦しみを感じ、終わりの来ない孤独に絶望している。

6. 線部「胸の真ん中がずくん、と痛くなる」について、授業の中で次のように【ノート】をまとめました。【ノート】中の【Ⅰ・Ⅱ】にあてはまる言葉をそれぞれ二十五字以内で答えなさい。また【Ⅲ】にあてはまる言葉として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

【ノート】

●武藤との会話における円華の心情

「胸の真ん中がずくん、と痛くなる」

【理由】

① 【Ⅰ】 ことを再認識したから

② 【Ⅱ】 ことを初めて知ったから

③ 【Ⅲ】 から

Ⅲ

ア 小春の言葉を思い出した

イ 武藤の発言に悪気がない

ウ 笑いごとにする事ができなかった

エ 友達に気を遣わせてしまっている

7. この文章の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

- ア 「――」や「……」を多用し、登場人物の心理に余韻が与えられ、読者が多様な解釈ができるようになっていいる。
- イ 短い会話の連続によって、ぎこちなかった円華と武藤が、徐々に心を通わせていく様子が描き出されている。
- ウ 回想シーンの中で、円華自身の漠然とした不安が徐々に浮き彫りになる過程が描き出されている。
- エ 円華の心情を比喻によって表現することにより、円華の抱える葛藤がありありと描き出されている。

二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

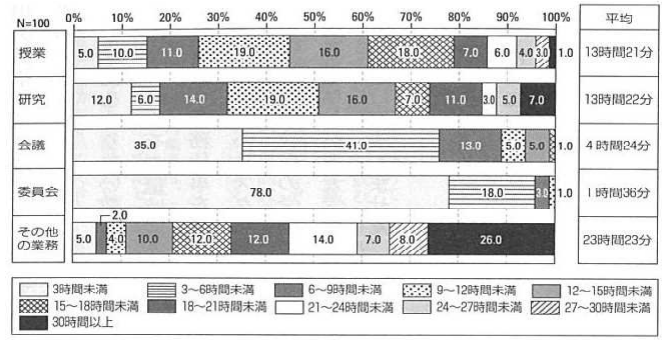


表1 大学教員が1週間当たりの各業務に費やす時間の割合
出典「教育と研究の充実に資する大学運営業務の効率化と教職協働の実態調査」より作成

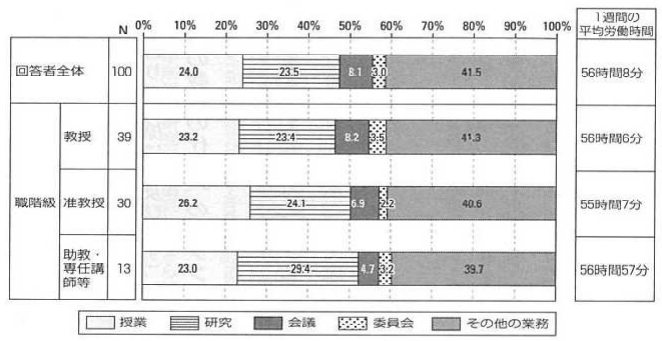


表2 1週間当たりの各業務に費やす時間の割合(職階級別)
出典「教育と研究の充実に資する大学運営業務の効率化と教職協働の実態調査」より作成

仕事を減らす」という解決策は、現場の教員の仕事への **A** によって、うまくいかないリスクもあるのです。

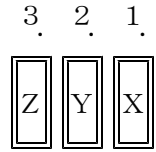
本当に大学教員の学務の時間を減らし、研究の時間を増やしたいならば、なぜ、研究より学務をやりがる大学教員がいるのかを考えなくてはなりません。そこまで踏み込まないと、この問題は解決しません。

では、この問題に「理解社会学」の視点を取り入れて考えてみましょう。なぜ、研究を忘れて学務に夢中になってしまうのか。それを「理解」するためには、学務に夢中になる人の「主観的世界」に注目する必要があります。

ここでは、自分自身の経験をもとに、理解社会的な分析のための「仮説」の構築をしていきます。それを通じて、大学教員がなぜ学務にハマってしまうのか、考えてみましょう。

1 こういった状況に対して、「教員にまわす事務仕事を減らす」というのが、第一にとられるべき対策でしょう。ただし、教員のなかには、研究より学務をしたがっている教員も少なからず存在するため、ことはそう簡単には運びません。事務仕事というのは、その量が現場の裁量で増えたり減ったりするものです。仕事を複雑にして増やそうとすればいくらでも増やせるものだし、ある程度、その量を減らすことも可能です。同じ仕事を振られたとしても、学務をやりたい教員の担当になればその量は増えるだろうし、学務を抑えたい教員の担当になれば、その量は減るでしょう(その影響は、まわりの同僚にも及びます)。つまり、「教員にまわす事務

私が考える、大学教員が研究よりも学務に夢中になる要因は以下の三つです。



以下、それぞれについて、見ていきたいと思えます。

まずは、仕事における「承認」の問題です。

心理学者のマズローが5段階の欲求として提示する「生理的欲求」「安全の欲求」「社会的欲求／所属と愛の欲求」「承認の欲求」「自己実現の欲求」(Maslow 1970=1987:55-72)のひとつとしても挙げられている通り、承認欲求というのは、人間の基本的な欲求のひとつです。しかし、研究者としての承認欲求を満たすというのは、そう簡単ではありません。

研究というのは、膨大な先行研究を踏まえた上で、そこに自分のわずかながらの **B** を付け加える作業です。まず、その先行研究をたどっていくだけで、とても時間がかかります。それを踏まえて調査をして自分なりの知見を導き出すのに時間がかかり、それを論文(著書)として執筆するのに時間がかかり、その論文(著書)が世に出たところで、それが学界で評価されるかどうかは分からない。別の研究者が自分の論文(著書)を引用し、その人の論文(著書)を発表してはじめて、

II 自分の研究の社会的評価が分かります。このように、ひとつの研究が評価されるまでには、長い長い時間がかかります。

私^{II}の例をひとつ挙げましょう。「やりがい搾取」という言葉につながったバイク便ライダーに関する研究は、2003年にバイク便ライダーの経験から構想を練り始め参与観察調査をし、2005年に論文にまとめて専門誌に掲載、2006年に書籍化され、2007年に本田由紀が「やりがいの搾取」というかたちで、私の研究を引用しつつ、議論を一步前に進めてくれました(第1章で引用した本田(2008)のもととなった論文です)。構想から評価までおよそ5年かかっています。しかも、これはかなりスムーズな例だと思います。私自身、色々苦勞して書いたのに誰にも引用されない論文(著書)もたくさんあります。とにかく、研究というのは、はじめてから承認を得るまでにとっても時間がかかる仕事なのです。

一方で、学務はやればやるだけ確実に感謝されるし、承認も得られます。研究のように、必死に時間をかけてやったのに、誰にも相手にされないなんてこともありません。やればやるだけ、^{III}「ありがとう」「ありがとうございます」「おつかれさま」です。「

と、職員にも同僚にも言われます。

研究においては、確実な成功は保証されていません。いつ学界のトレンドが変わるか分からないし、一夜にしてこれまでの研究の積み重ねが無に帰することもあります。しかし、学務は、やればやるだけ感謝されます。私自身、「研究は裏切ることもあるが、学務は裏切らない(ギョ)」と、本気で思ったことさえあるくらいです。

つまり、学務は、確実に、短期的に仕事を通じた承認欲求を満たすことができます。

学務は(しばしば誤解されるように)単純な事務作業だけではありません。それは、かなり高度な、人間関係や組織内の調整を必要とする作業も含みます。学内の組織図を頭に入れ、学則を覚え、構成員の所属と名前、人間関係を整理し、大学全体の組織の動きのダイナミズムを体得し、さらにそれらを自分なりに組み合わせ、都度都度、問題を解決していかなくてはならないのです。だからこそ、その能力はどこまでも向上していくもので、遂行する者の「向上心」を満たすものでもあります。

その能力は、経営学者の田久保善彦の言う「健全な根回し³」を行う能力に近いものです(田久保 2021)。

田久保は、会社のなかで成果を上げるためには、①「1人で完結する仕事は限られている」、②「それゆえ、他者に協力を仰ぎ動いてもらわなければならない」、③「他者に動いてもらうためには、相応の準備をしなければならない」の三つのポイントを認識することが大切で、特に三つ目のポイント「事前準備＝根回し」の重要性を指摘しています。

田久保は、根回しを成功させるために、以下の四つのポイントを挙げています。

① ステークホルダー(交渉相手)の分析をする：関係者が多様な場合には、「目標」「価値観」「見解」の違いが、意見の違いをもたらす。こうした場合、「微妙な」調整が必要不可欠となってくる。対象となる事柄に対し、関係者がどのような興味関心を持っているか、または影響力を持っているかを、冷静に分析することが重要となる。(引用者による要約)

② 人脈を駆使してキーパーソンにたどりつく：最終的な意思決定者にいきなり根回しすることは困難なことが多い。そのため、その人にたどり着く道筋をおさえ、人脈の連鎖で、梃子の力を効かせた根回しをしなくてはならない。(同上)

③ 相手の感情や面子に配慮する：人間には感情があるので、正論を理路整然と説明すれば、相手は納得するというわけ

ではない。根回しの際には、相手の気持ちや立場を配慮することが重要である。また、相手の面子もつぶさないことにも注意しなくてはならない。(同上)

④「下・横・斜め」の根回しもする：キーパーソンに対しては根回しが成功したとしても、現場で反対する人がいて動かないということもある。最終的に実行することまでを考えるのであれば、上だけではなく「下、横、斜め」と、複数の方向性での根回しをする必要がある。(同上)

そして、「健全な根回しが上手な人の特徴」として、以下の三つを挙げ、「これらは、付け焼刃でどうにかなる C ではないので、日ごろから意識して取り組み、身につけておきましょう」と指摘します。

特徴① 相手の立場になって考えられる：相手の気持ちを動かすためには、「相手に対して思いやりを持つこと」、そして「相手の立場をどのくらい想像できるか」が大事です。交渉相手の多くは、自分よりも上の立場の人です。そのような人の立場が想像できるよう、日ごろから経営視点を養うための勉強をしておきましょう。

特徴② 先を見通す力がある：根回しが上手な人は、「相手にこのような説明をしたら、こう反論されるのではないか？」「このような反応をするのではないか？」など、予測シミュレーションする能力にも長けています。

特徴③ 社内に味方を作っておく：相手からすでに良い感情を抱いてもらえていたら、交渉もぐっとスムーズに進みます。また、キーパーソンを探す際にも、情報提供や紹介をしてもらえるかもしれません。社内の良好な人間関係構築にも日ごろから気を配っておきましょう。

こうした能力が必要とされる学務は、「分析力と人脈と根回し」を賭けたゲームであり、それは、研究とはまったく異なるタイプの「やりがい」を与えてくれるものなのです。

こうしたゲームは、特に、組織の危機の際にやりがいのあるものとなります。組織のなかにいけば、大なり小なり、危機

的狀況が現れるものです。職場全体が「これにどうやって対応しようか」とザワザワする。そんなときにスッと現れ、組織人としての経験で培ってきた人脈や分析力、根回し力をもって解決するなんてことがあれば、そのゲームの勝者の威信は、平常時の何割増しにもなります。

IV アメリカの作家 レベッカ・ソルニットは、災害などの非常時にこそ、人々の結束力が強まり、集団が活性化すると指摘しています。

災害は、世の中がどんなふうに変われるか——あの希望の力強さ、気前の良さ、あの結束の固さ——を浮き彫りにする。

相互扶助がもともわたしたちの中にある原理であり、市民社会が舞台の袖で出番を待つ何かであることを教えてくれる。

…(中略)…⁴ 地獄の中のパラダイム は即興的に作られる。わたしたちはそれを状況に即して作り、その過程で、わたしたちの強さや創造力が引き出され、Dにがんじがらめになっているときでも、自由な創案を發揮できるようになる。地獄の中に作られたこういったパラダイスは、わたしたちが何を欲していて、わたしたちが何者になれるかを教えてくれる。(Solnit 2009=2020:467-468)

組織人にとって、自らの「強さや創造力」を發揮する最大のチャンスは、組織の非常時におとずれます。そこでリーダーシップをとり、危機を切り抜けることができれば、その人の職場での威信は一気に高まるでしょう(こうした危機が連続的に続くような職場にあつては、その威信は一層高まります)。

もちろん、研究においても、大なり小なり、危機的な状況は現れます。しかしそれは個人的な問題です。個人的な問題である以上、そこでいかにうまく乗り切っていたとしても、研究仲間の間での評価は上がれど、組織内のインフォーマルな集団における評価にはそれほど影響を及ぼすことはありません。しかし、学務は違います。職場の危機は共有された集団的なものであり、そこでは、集団の凝集性は一気に高まります。こうした、職場内での学務ができる人の威信の高さも、学務をすることの魅力のひとつとなっていると考えられます。

(阿部真大『会社のなかの「仕事」 社会のなかの「仕事」 資本主義経済下の職業の考え方』による)

1. A D にあてはまる言葉として適当なものをそれぞれ選び、符号で答えなさい。

ア スキル イ オリジナリティ ウ スタンス エ コミュニティ

2. 線部1「こういった状況」の内容を示したものが本文の表1・2である。表1・2から読み取れることとしてあてはまるものには○、そうでないものには×をそれぞれつけなさい。

ア 職階級が高いほど、1週間のなかで会議・委員会・その他の業務に費やす時間の割合は増加する傾向にあり、授業や研究に費やす時間の割合は減少する傾向にある。

イ 1週間当たりの授業と研究に費やす時間を比べると平均時間は同程度であるが、最も時間が長い層と短い層の割合はそれぞれ研究のほうが高い。

ウ 大学教員の業務で最も精神的負担が少ないものは委員会であり、次に負担が少ないものは会議であるという点ほどの職階級にもあてはまる。

3. 線部2に「研究者としての承認欲求を満たすというのは、そう簡単ではありません」とありますが、その理由としてあてはまらないものを選び、符号で答えなさい。

ア 研究の流行の転換点はわかりにくいため、研究内容が急に全く評価されなくなることがあるから。

イ 研究は権威ある他者が主観的に審査を行うため、自らが望むような結果とはならないおそれがあるから。

ウ 研究は学務に比べて、自分が行った行為の量と周りからの評価や承認の量が比例するものではないから。

エ 研究は学務に比べて、長期的な積み重ねが必要になるうえに確実な成功が保証されているわけではないから。

4. 線部3 「健全な根回し」を行う能力」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 「健全な根回し」の説明としてあてはまらないものを選び、符号で答えなさい。

ア 最終的な意思決定者にたどり着けるようにするために、自らの持つ人脈をうまく活用すること。

イ 実際に現場を動かすために、最終的な意思決定者だけでなく現場の人たちへも協力をあおぐこと。

ウ 相手に協力してもらうために、自分の考えよりも相手の気持ちや立場を最優先して行動すること。

エ 価値観の違いを踏まえて調整をスムーズに進めるために、相手の興味関心や影響力を分析すること。

(2) 「健全な根回し」を行う能力」に必要なこととして適当なものを三つ選び、符号で答えなさい。

ア 相手の立場になってものごとを客観的に捉えること。

イ 相手が望む答えを瞬時に生み出す創造力を常に養うこと。

ウ 社内の良好な人間関係の構築に日々気を配ること。

エ 自分が意思決定者になったときのために経営視点を養うこと。

オ 相手の反応に合わせてその場で対応を考えること。

カ 相手の反応を想定したうえで備えること。

5. 線部4 「地獄の中のパラダイス」とはどのような状態ですか。三十五字以内で答えなさい。

6. X Z にあてはまる言葉として適当なものを本文の展開に沿ってそれぞれ選び、符号で答えなさい。

X

- ア 短期的な承認への欲求
- イ 個人より優先される組織・集団
- ウ 研究にはない学務のやりがいの健全さ

Y

- ア 組織の複雑なダイナミズム
- イ 「やりがい搾取」への落胆
- ウ 組織内能力の向上と学務のゲーム性

Z

- ア 承認を得るまでに必要な積み重ね
- イ 職場内での威信の高さ
- ウ 研究への評価と威信の関係性

7. この文章の表現の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア ~~~~~ 線部Ⅰ 「なぜ、研究を忘れて学務に夢中になってしまうのか」という問題提起が、研究を疎かにしてしま

イ ~~~~~ 線部Ⅱ 「私の例をひとつ挙げましょう」と具体例を挙げることによって、研究には周りの人の協力が必要で

ウ ~~~~~ 線部Ⅲ 『ありがとう（ございます）』『おつかれさま（です）』と一部を省略した表現を用いることによっ

エ ~~~~~ 線部Ⅳ 「アメリカの作家、レベッカ・ソルニット」の言葉を引用することで、学務には研究とは違って他者からの評価をあげられる魅力があるという筆者の主張が読者に強く印象づけられている。

三、次の①～⑤の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 人心を掌握する。
- ② 不粹な質問。
- ③ 仕事を委嘱される。
- ④ 大きな荷物を携える。
- ⑤ 新たな任地へと赴く。

四、次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① コンメイする政局。
- ② 皆様のごジンリョクに感謝します。
- ③ 船がアンシヨウに乗り上げる。
- ④ 灯油のオロシネが上がった。
- ⑤ 委員会にハカる議題。

余白